

山武の森から

森林研究所の南側の斜面は、スギやヒノキの人工林の他に、まとまった面積のコナラなどの雑木林があります。これらの林は現在、新緑が美しい季節になっており、休憩時には散策が楽しくてリラックスできます。その一角に小さな池があり、10年程前の5月頃にセンサーカメラを仕掛けてどのような動物がこの池に出没するか観察したことがありました。センサーカメラは動物が近づくと自動で撮影するカメラです。その結果、タヌキ、イタチ、ハクビシン、オオタカが写っていました。写真には写っていませんでしたが、リスやウサギもたまたま目撃され、この時期にはキジがよく鳴いています。このように森林研究所の中には、里山の動物たちが意外に多く生活しているのわかりました。

あれから10年が経過し、近隣ではイノシシの被害が報告されるようになってきましたので、森林研究所にもいつ出没するようになるのか心配です。試験用の苗木が掘り起こされたり、試験地が荒らされる可能性があるためです。そこで、久しぶりに同じ場所で同じ時期にセンサーカメラを設置してみました。

今回、撮影された画像を見ると、一番多く写っていたのは前回撮影されなかったアライグマでした。その他にハクビシンとタヌキが10年前と同様に写っていました。幸いにもイノシシは写っておらず、まだ森林研究所までは生息域を拡大していないようです。しかし、特定外来生物であるアライグマが多く写っていたことから、雑木林の小動物や池の生物、カエルなどへの影響及び周辺の農作物被害が懸念されます。

森林研究所がある山武市では、平成29年度にイノシシ、アライグマ、ハクビシン、タヌキによる農作物被害が報告されておりますので、今回の撮影結果は、農作物被害を与える動物たちがイノシシを除き、森林研究所内にも生息して

いることを示すものです。駆除すべきである特定外来生物のアライグマは論外ですが、在来の動物については豊かな里山の構成員として共存していくことも大切であり、農作物被害が出ないように適正に生息数を管理するとともに、環境整備、防護柵の設置等の総合的な対策を考えていく必要があります。（所長 岩澤勝巳）



アライグマ（特定外来生物）



ハクビシン（外来種か在来種か不明）



タヌキ（在来種）

里山活動の支援を行っています

4月から再任用職員となり造林分野の研究を担当することとなりました福島です。引き続きよろしくお願いいたします。

森林研究所では、研究課題とは別に、様々な相談や病害虫の診断などを行っています。今回は、そのうちの一つである里山活動の支援について情報を提供します。

千葉県では、平成15年に施行された「千葉県里山の保全、整備及び活用の促進に関する条例」（通称、里山条例）を契機に、多くの里山活動団体が県内各地で活発に里山を保全、整備し活用する活動を行っています。条例では、県の責務としてこのための調査研究を行うこととされており、この定めに基づいて森林研究所は里山活動に対する支援を行っています。

昨年度は、いちほら里山クラブ（市原市天羽田、古敷谷）、NPO法人ラーバン千葉ネットワーク（印西市草深の森）、おとずれ山の会（市原市天羽田ジャックの森）、NPO法人バランス21（千葉市谷当里山パーク）の4箇所ですり山巡回相談を行いました。里山巡回相談は、森林研究所とNPO法人ちば里山センター（以下、ちば里山センター）が協力して実施しているもので、巡回相談を希望する里山活動団体に対し、現地で森づくりの相談や技術的な指導を行うものです。

里山を保全、整備する活動を実際に行ってみると、どんな森を目指したらよいのか、どんな管理をしていけばよいのか、どんな活用方法が考えられるのかなど、いろいろな疑問が湧いてくると思います。里山巡回相談では、このような様々な疑問に対して、活動対象とする森のタイプ（人工林、竹林など）、地形などの自然的条件、地域における森の位置づけ、周囲の開発状況などの社会的条件、各団体が目指す活動の方向性などを実際に現地で確認し、森づくりのアドバイスをしています。

また、里山巡回相談のほかにも、一般の方を対象にちば里山センターが毎年開催している「ちば里山カレッジ」において、里山活動の進め方や、人工林、広葉樹林、竹林などの森のタイプ別管理技術の講義、現地実習等を行っていますので、里山を保全、整備する活動にご興味をお持ちの方はぜひご参加ください。

なお、里山巡回相談、ちば里山カレッジについてのお問い合わせは、ちば里山センター（メール：info@chiba-satoyama.net）にお願いします。（主任上席研究員 福島成樹）



いちほら里山クラブの活動地（人工林）
における里山巡回相談
（ちば里山新聞 55号より転載）



いちほら里山クラブの活動地（広葉樹林）
における里山巡回相談

マツ材線虫病の抵抗性クロマツの品種試験林を作りました！

マツノザイセンチュウ抵抗性クロマツは通常のクロマツよりもマツ材線虫病に強く、近年では県有海岸保安林の植栽に使用される苗木は、すべて抵抗性クロマツ品種となっています。森林研究所ではその次代検定が必要と考えています。

次代検定とは、優良個体の性質が次世代である苗木に伝わるのかを確認することです。苗木のほとんどは実生すなわち種子から育てるので、母親である優良な個体から種子を採取すれば苗木にその優良な性質が遺伝すると考えられます。しかし、種子には父親である花粉親の性質も遺伝するため、優良個体の性質が次世代である苗木にどの程度伝わるのかを確認する必要があります。

抵抗性クロマツの次代検定では、実際に海岸に苗木を植栽して、通常のクロマツと比べてどの程度マツ材線虫病に強いのか、成長に違いがあるかなどを評価する予定です。長い時間がかかりますが、林木育種の研究ではとても重要なことです。

そこで、地域への社会貢献の一つとして北部林業事務所と協定を結び旭市内の海岸県有保安林の整備活動に取り組んでいる旭農業高等学校の協力を得て、抵抗性クロマツの次代検定を目的とした品種試験林を造成しました。旭農業高等学校生徒により抵抗性クロマツ苗木 445 本が 4 月 11 日に植栽され、今後の下刈り等の管理作業も同校の協力が得られる予定です。

この品種試験林には、採種園に導入されている 21 品種と在来 2 品種の実生苗が植栽されています。現在、九州から東北にかけて 20 府県以上で抵抗性クロマツ苗木が生産されていますが、次代検定を目的として造成された品種試験林はほとんどありません。特に、この中の 13 品種 233 本は近年選抜された品種であり、品種試験林と

しての植栽は全国初と思われます。

さらに、この試験林には 4 品種 45 本のさし木苗も植栽されています。これらは、将来さし木苗を普及する場合の実証試験地として、貴重な情報が得られることも期待されます。

旭農業高等学校と北部林業事務所の協力のもとに造成された抵抗性クロマツ品種試験林で品種ごとの評価が進むことで、将来の抵抗性クロマツ品種のさらなる改善に役立つものと考えています。 (主任上席研究員 遠藤良太)



教員による植栽方法の指導



生徒による植栽

森林研究所の動き

研究職員と担当研究分野

令和元年度の研究体制は次のとおりです。

所 長 岩澤 勝巳

主任上席研究員 遠藤 良太

(林木育種・事業)

主任上席研究員 福島 成樹 (森林造成)

上席研究員 福原 一成 (森林害虫)

上席研究員 宇川 裕一

(防災・環境保全・放射性物質対策)

研 究 員 黒田 学 (木材・バイオマス)

研 究 員 小林 真生子

(森林病害・多面的機能発揮)

研 究 員 幸 由利香 (獣害・林木育種)

注：() 内は担当研究分野

簡易な搬出方法の比較 (黒田学)

・1 年生クロマツコンテナ苗の生産技術と植栽適期 (幸由利香)

4 2月22日 民国連携による森林整備の推進に向けた意見交換会が富山地域センター (南房総市) で開催され、福原上席研究員が講師として出席しました。

5 3月13日 緑化技術講習会が県庁で開催され福島所長が講師として参加しました。

6 3月14日 花粉調査委員会が三会堂ビル (東京都港区) で開催され、福島所長が出席しました。

7 3月20日～24日 第130回日本森林学会大会が朱鷺メッセ (新潟県新潟市) で開催され、以下の3課題を発表しました。

・スギ雄花の着花指数と着花量の関係

(遠藤良太)

・千葉県におけるスギカミキリの被害推移

(福原一成)

・千葉県におけるスギ人工林内への広葉樹の侵入状況 (小林真生子・福島成樹・五十嵐哲也・倉本恵生・宮本和樹・酒井武・星野大介)

刊行物

1 平成30年度試験研究成果発表会資料 (林業部門) -新しい農林業技術- (平成31年2月発行)

2 農林水産技術会議技術指導資料「原木シイタケ栽培におけるフタモントンボキノコバエの防除方法」(平成31年3月発行)

主な会議・行事 (平成31年1～4月)

1 1月16日 全国林業試験研究機関協議会役員会、総会が中央合同庁舎4号館 (東京都千代田区) で開催され、福島所長が出席しました。

2 1月17日 森林林業技術シンポジウムが東京大学弥生講堂一条ホール (東京都文京区) で開催され、福島所長他1名が参加しました。

3 2月7日 第55回試験研究成果発表会 (林業部門) をさんぶの森文化ホールで開催し、以下の3課題の成果を発表しました。

・マツ材線虫病により高い抵抗性を持つ苗木生産 (福原一成)

・未利用木質バイオマスを有効利用するための

人事異動

4月1日付け

岩澤 勝巳 中部林業事務所から転入

(編集責任 主任上席研究員 遠藤良太)



イロハモミジに着いた幼種子